

短期交換留学生の居場所感覚

—印象に残る／継続する人的ネットワークの契機—

牲川 波都季・高村 竜平

Abstract

International students experience various extracurricular activities and off-campus life as well as course-studies. We have to understand them not only as “students” but also as “citizens” . This paper examines where and how international students in Japan create memorable and continuous human-relations. In order to do so, this study was based on interviews towards former international students.

It appears that there is a large variety of opportunities for them to engage in significant human-relations and to find places where they can be themselves besides the classrooms, such as student clubs, host family activities, part time jobs and travels. This variety of opportunities seems not to depend on individual attributes of each student. Rather than that, the students choose their relationships with important people or places out of a pool with various options.

This result leads to the conclusion that universities are required to provide the students as many encounter opportunities as possible, even though the consequences of encounters are uncontrollable and unpredictable. All the more, it is of ultimate importance that conditions for international students to start their relationships by themselves are provided.

【キーワード】

交換留学生, 居場所, ネットワーク, ホストファミリー, アルバイト

1. はじめに

留学生は、仕事や観光ではなく教育機関での学習をその本分としている点で、そのほかの海外滞在と異なっている。しかし留學生活には、大学での授業に加えて、その他課外活動や大学外での生活も当然含まれる。したがって留學生活について考察する際には、授業以外の学内活動や、学外も含めたさまざまな場所で生きる生活者として、留学生を捉える視点が必要であろう。

では留学生本人にとって、授業とそれ以外の生活との重みはどのように感じられているのだろうか。また授業以外の生活で印象に残っている人物や生活の場所はどこで、それはなぜなのか。この問いに答えることで、留學での学びとは何か、そこに大学はどのように関わるのかについて考えてみたい。

すでにこのような観点から、留学生のもつネットワークが生活および勉学にあたる影響について、研究がいくつかなされている（田中ほか 1991;中山 2001;菊岡ほか 2005など）。これらの調査はいずれも、留學中あるいは帰国直前の時期にインタビューやアンケートを

おこなっている。それに対して今回は、すでに帰国した学生に秋田での生活について語ってもらうことにした。

帰国した学生についてのインタビュー調査は、松本久美子によるものがあり（松本2009）、ここではカンボジアに帰国した3人の元留学生について、日本での勉強と生活についてのインタビューを実施している。しかしこの研究は帰国した留学生にたいする大学のフォローアップ体制を直接の課題としているため、学生が帰国した後の大学としての対応に重点がおかれている。一方今回の報告では、留学生の語りの中から、帰国後しばらくたっても継続している人的ネットワーク、現在も重要だったとして忘れられない居場所などについての考察をおこなうこととした。留学生の派遣や受け入れをはじめとする、大学における国際交流事業の意義が、国境を越えた相互理解の増進にあるとすれば、帰国後にも継続したり思い出される場所や人間関係こそが、日本での生活の記憶として留学生のその後の生活に影響するという点で重要であろうと考えたためである。

2. 調査方法および対象者の概要

今回の調査は、2011年10月31日から11月2日にかけて、秋田大学と大学間交流協定を締結している韓国のウォンガン大学校およびハンバット大学校を訪問しておこなった。両大学校の概要及び本学との関係を整理しておく、以下のとおりである。

○ハンバット大学校¹⁾

韓国の中央部に位置する大田特別市²⁾に立地する国立大学である。工科大学・人文科学大学・経商大学の3学部があり、本学との交流は2001年度より人文科学大学の日本語科を中心におこなわれている。ほぼ毎年5名の交換留学生（特別聴講学生）を本学に派遣しているほか、毎年数名の私費留学生（科目等履修生）を派遣している。これまで本学へ派遣された留学生数は、上記の二種のほか日本語・日本文化研修生（日研生）や研究生を含めて2001年以降合計98名である（2011年12月現在）。ハンバット大学校には夜間部があり、社会人生活をしながら、あるいはその経験のある学生が多数いることが一つの特徴である。本学へも社会人経験をもつ学生が多く派遣されている。本学以外に学生交流を行っている日本の大学としては、大阪産業大学および香川大学がある。

○ウォンガン（圓光）大学校

やはり韓国の中央部にある全羅北道の益山市に立地する私立大学である。教学大学（ウォンガン大学の母体は仏教の一派である円佛教である）・人文科学大学・経商大学・生命資源科学大学・薬学大学・師範大学・自然科学大学・生活科学大学・医科大学・歯科大学・韓医科大学・社会科学大学・工科大学をもつ大規模な大学である。本学とは2008年度より学生間交流をおこなっており、師範大学の日本語教育学科が交流の中心である。本学へは毎年5名の交換留学生を派遣し、科目等履修生や日研生などを合わせて2006年以降合計29名である（2011年12月現在）。本学以外に学生交流を行っている日本の大学としては、佛教大学・中部大学がある。

調査期間中、10月31日はウォンガン大学校、11月2日はハンバット大学校で、現在も在学しているかつての留学生に5-6人のグループによるインタビューを実施し、11月1日には卒業した留学生に単独でインタビューした。所要時間はいずれも1時間半から2時間であっ

た。話題は以下のような諸点であり、学生の所属する学科を通じて事前に連絡しておいた。

○大学外について、どんな人との交友が自分にとって大切だったか。一緒に行った留学生の中に、特に仲良くなった人はいるか。それはなぜか。

○それらと現在の自分との関係について。

○面白かった大学内の行事や授業、その理由について。

○もっとこうだったらよかったという点がないか。大学内・大学外、自分に対して。

ただしとくに発言に関して限定はもうけず、自由に語ってもらった。またインタビューは全て日本語で行った。発言が特定の参加者に偏りつつある場合には、調査者が発言の少ない参加者に質問するなどの方法で、参加者全員に意見を聞くよう努めた。

調査対象者は以下の通りである（カッコ内は留学身分と留学期間）。Aさんを除いては、どの対象者もハンバット大学校は日本語科、ウォンガン大学校は日本語教育学科所属学生である。

ハンバット大学校

A（女 2009.10-2010.8 日研生，卒業生）

B（女 2010.4-2011.3 特別聴講学生）

C（女 2009.4-2010.3 特別聴講学生，2010.4-2010.9 科目等履修生）

D（男 2010.4-2011.3 特別聴講学生）

E（男 2010.10-2011.3 特別聴講学生）

ウォンガン大学校

F（男 2009.4-2010.3 特別聴講学生，2010.4-2011.3 科目等履修生）

G（男 2010.4-2011.3 特別聴講学生）

H（男 2009.4-2010.3 特別聴講学生）

I（女 2010.4-2011.3 特別聴講学生）

3. 忘れ得ない人的ネットワークの契機

3-1 考察の視点

以下では、インタビュー調査の結果を示し、韓国出身の短期交換留学生在が特に重要と認識していた人的ネットワークは、何を契機としそれはなぜだったのかについて考察する。結論を先取りして言えば、留学生在が人的ネットワークを築いていった契機は、一人ひとり全く異なっていた。調査対象となった留学生在は、全員が韓国出身であり、秋田大学の大学間協定校からの交換留学生在であった。また、滞在年数はほとんどが1年であり、いずれも日本語能力試験N1レベルの日本語能力を有している点でも共通している。しかし、継続的または印象的な人々と出会ったと感じている場所は、それぞれに異なっていた。

3-2 コリアサークル

코리아サークルとは、特定地域の留學生との交流を目的とした、唯一の大学公認サークルである。韓国出身の留學生のほとんどは、一度はこのサークルと関わりをもつ。2005年より活動しており、11月の大学祭で模擬店を出したり、一泊旅行を企画するなどの活動をおこなっている。構成員は秋田大学に所属する正規生および留學生であるが、正規課程に

在籍する韓国人留学生も参加している。

1年目を交換留学生として2年目を科目等履修生として秋田大学に留学したFさんにとっては、このコリアサークルが、授業外でもっとも重要な場の一つだったという。

Fさん ちょうど今、秋田大学で文化祭でしたよね。去年の今頃、一昨年今頃、チヂミやりながらみんなと遊んだのが、また10月の月末になったら思い出して。それがほんとによかったと思うんですね。

大学祭で韓国料理の模擬店を出すという行事には、韓国出身の留学生が何らかの形で参加しており、今回の調査対象者もほとんどが関わりをもっていた。

Fさん で文化祭も、ま毎年、まあそれはサークル内で、サークルの中で決めることなんでしょうけど、何かやりましようっていう話が出るんですね。まあチヂミであろうがまあほかの食べ物であろうが、まずやろうって話が出るから、それでみんな一緒に遊べるって話か話し合える時間ができたということですね。

一つの行事を実施するためには話し合いの時間を取る必要があります、それをきっかけに自然と親しくなるという過程をFさんは気にしていたようだ。また、積極的に世話をしてくれる団体としても、Fさんのほか、GさんやHさんもコリアサークルがあって助かったと認識していた。

Fさん ほかの国の学生はどうなのかわからないんですが、韓国人として秋田大学に行くと、最低限の、受け入れてくれて、一緒に話し合ってくれる日本人、面倒見てくれる、学生がいるって話、それはいいですね。

調査者 その、主にどういう点のことを、コリアサークルの人と相談したりするの？学校のこととか？

Fさん 一応ですね。

Gさん 基本的に何でもです。

調査者 ま例を挙げればたとえば。まずこれとか。

Fさん バイト、最初のバイト。

コリアサークルのように特定出身国の留学生との交流を目的としたサークルは、秋田大学にはほかにない。そのことを受けて、FさんやGさん、またHさんは、秋田大学に来れば自分たちのことを気にかけてくれる人たちが必ずいるということに安心感を抱いていたことがわかる。また最初のアルバイトを紹介してくれるなど、コリアサークルは、交換留学生の生活を経済的側面から支援するという、実際的な手助けを行っていたと言える。このとき、Fさんが紹介されたアルバイト先の社長は、「いつも面倒をみてくださって」いたとのことであり、帰国から半年以上が経過した現在でも電話連絡をとりあうほどの、継続的で深い関係をもちえた相手として感じられている。Eさんも、コリアサークルでしりあった日本人学生と、帰国後の現在でもフェイスブックでの連絡をつづけているという。

他方で、以下のFさんの発言からは、コリアサークルは交換留学生が一方向的に支援される場としてではなく、日本人学生や他のサークルメンバーに対し、交換留学生からも貢献できる場として機能していたことがわかる。

Fさん まあ、ま（アルバイト先を紹介してくれた韓国出身の正規学部学生は、）韓国人の後輩だから一結構面倒見てくれたと思うんですけど、ま彼以外にも香川さ

んとかゆきちゃんとか³⁾、みんな、基本的にみんな僕たちの面倒みようとする立場ですね。そういう考えもっているから、すごくありがたいし。で、ぼくは、遊ぼうと誘う立場なので、 코리아サークルで何かあったらまず企画を出して、ほかの日本人の学生を誘って。で一緒に、いろいろ、たとえば、どこかに。まあ白神山地に行ったりー、まあ、一泊二日でどこかへみんなで行ったり。海水浴場とか、行ったり。

学部正規課程に所属する韓国人留学生がFさんにバイトを紹介したことからわかるように、秋田と韓国の両方で生活経験をもつ構成員がサークルにいることも重要であった。2009-2010年度には、前年度にハンバット大学校に交換留学していた日本人学生がサークルの中心を担い、活発な交流活動を行っていた。

Fさんによれば、サークルでは月1回は何か行事をやるという方針だったとのことである。先の語りで見られるとおり、Fさん自身も、秋田県内の各地に出かける小旅行を企画し誘う立場だった。Fさんにとって、 코리아サークルは、支援されると同時に自らも貢献を果たすことのできる場として、強く印象に刻まれた居場所だったと言える。

3-3 あきたのファミリー

Fさんとは異なり、Iさんは大きな行事の時以外、 코리아サークルとあまり関わらなかった。その代わりに、Iさんは、「あきたのファミリー」と「里親」に頻繁に会い、そのことが現在まで印象に残っていると話した。

「あきたのファミリー」とは、秋田県国際交流協会が主催・運営する事業で、秋田県内の教育機関に在籍する「留学生を気軽に家庭に呼んで一緒に過ごしたり、会えないときは、電話やメールをしたりと、自由に交流していただく活動」（秋田県国際交流協会 2011: 2）である。2011年春には16カ国65人の留学生が48家族と、秋には16カ国59人が42家族とマッチングされ、交流活動を行った（秋田県国際交流協会 2011: 4, 7）。

Iさん 私の場合は 코리아サークルより、里親とか、あきたのファミリーとかのほうが交流が多かったんですね。それでそっちのほうにもっと、知らないことを聞いたり、面倒をみてもらったり、したんですけど。

調査者 なんでそっちのほうがよくあったんですが、Iさんにとっては？

Iさん どうしてかはよくわからないんですけど、 코리아サークルと会ったことはあんまり、なかったんですね。大きい行事があったら私も参加したんですけど、それ以外には、別に。一人ひとりで個人的に会って、遊びに行ったりはあんまり。

受け入れ家族に対して留学生が多すぎると、あきたのファミリーが見つからない留学生も出てくる。また留学生との関わり方は各受け入れ家族に完全にまかせられていることから、必ずしも頻繁に会う関係になるとは限らない。しかし、マッチングが上手くいけば、Iさんのように、個人的に一緒に出かけるような関係を作りうる。今回の調査では、ほかにAさんが、ファミリーが遠方に引っ越すまでは「結構家に遊びに行って、韓国料理一緒に食べたり、かまくら一緒に行ったり」と話し、またGさんも「あきたのファミリーもすごくよかった」と、現在までも思い出に残るような関わりがあったと話した。

後述の「ハングっこの会」と異なり、あきたのファミリーでホストファミリーになる家

族は公募で集められ、かつ条件の中に、国籍・性別を問わず受け入れ可能であることという規定がある。つまり韓国出身の留学生にとっては、韓国に特化して関心をもっているわけではない家庭と知り合うことのできる、貴重なチャンスとなっている。こうした完全公募のホストファミリー制度は、秋田県内では国際交流協会によるあきたのファミリーしかなく、留学生と秋田県民とが相互に知り合うための重要な機会を提供している。

3-4 ハングっこの会

一方、2010年度までに来日した韓国出身交換留学生については、ほぼ全員に里親がつくことになっていた。「里親」とはいえ留学生が家に住み込むというのではなく、里親と留学生がペアになり、食事や旅行あるいは韓国語の学習などの形で交流するものであった。里親のあつまりである「ハングっこの会」は、2009年ごろには秋田県内に在住する8名の市民から構成されており、40-50代の女性を中心であったが、その配偶者が交流に参加する場合もあり、またかつては男性の会員もいた。この会は1年に一度（4月）の総会とバス旅行を基本とし、そのほかの交流の仕方は里親と留学生に任されていた。たとえば、Gさんは、里親が大規模な飲食店グループの会長だったことから、「途中からバイトを入れてもらって、すごく助かった」という。里親の中にはいわゆる名士と言われるような社会的地位の会員がおり、里親はアルバイトを紹介するといった、留学生の経済状況の支援にも貢献していたことがわかる。

人数の問題であきたのファミリーが見つからなかったHさんだが、留学期間中、里親とは週1回会い、また帰国後の現在も連絡をとりあっているという。Bさんの場合も、コリアサークルにはあまり行かなかったが、「里親との交流が大きかった。今でも連絡し合っている。今年の6月にも韓国に旅行に来たので会った」ということだった。さらにコリアサークルにあまり関心をもてなかったIさんも、里親とあきたのファミリーに頻繁に会っていた。

調査者 引越しの時にきてたのが里親さん？ それともあきたのファミリーの方かな？
(中略)

Iさん 帰国の時は里親さんの・・・、里親さんはちょっと肩がちょっと悪く、五十肩？
だったので、手術で来れなかったんですけど、その里親さんの妹さん。

調査者 妹さんか。僕がみたの妹さんか。

Iさん 妹さんが来た。

調査者 自分が行けないけど、手伝った

Iさん はい。その妹さんとも、里親さんと会うとき、一緒に会ってましたので。

調査者 よく知ってるから。

Iさんは、里親本人だけでなくその妹にもしばしば会っていた。そして、帰国の際の引越準備といった、留学生にとって心身ともに負担となる作業を、妹が里親本人に代わり手伝ってくれたという。Iさんにとっては、里親とその家族がいざというときに頼りになる存在だったと言える。

あきたのファミリーと同様、ハングっこの会でも留学生との関わり方は里親自身の判断に任せられていた。そのため、IさんやHさん、Bさんのように、強い関係や継続的な関係

を築くことができた場合もあれば、自分の里親とはそれほど親しく交流しなかったという留学生もいる。Dさんもその一人だが、その代わりに先のBさんの里親や、その里親が紹介してくれた「おばさん」と非常に親しくなった。

Bさん (Dさんは) 私の里親と私がバイトしているおばさんたちにほんとに、かわいがられた。

調査者 そうなの。

Bさん おばさんたちに人気です。

Dさん 一緒に何回か行ったことがあるんですけど、横湯市(里親の住所)の方に。そのときに。一人で行くのがなんか。

Bさん ううん。

Dさん 最初は一人で行って一人で帰るのは・・・、一緒に行ってくれてなんか言われて・・・。

Bさん 最初、私一人で通ったんですけど、私の里親さんとDさんと会って仲良くなって、その(里親の)山田さんの紹介で、ほかのおばさんと会って、そのおばさんの名前が村田さんですけど、その村田さんがほんとにほんとにDさんが大好きで(笑)。一緒に行ったらどうですかと聞かれて、じゃあ一緒に行こうかと、連れて行ったら、私よりほんとに、(中略)もてもてでした。もてもて。

Dさん (笑)

熱心に留学生と交流しようとしたBさんの里親がキーパーソンとなり、自分の里子ではなかったDさんと自らが会っていただけでなく、Dさんと自分の友だちとをつないでいたことがわかる。このDさんもまた、コリアサークルには馴染めなかったという。

Dさん あんまり行かなかったですね。私が考えている、興味がある部分とコリアサークルの人が興味がある部分とちょっと違いがあるからと思って。だいたいコリアサークルの人が興味があるのは韓国の関係があるものとか。ドラマとか、K-POPとか、多いんですけど。僕は、そこらへんが全然、テレビも見ないし、音楽もあんまり聞かないし。(中略)話をしても、芸能界の人とか、歌手、有名人の名前が出てきても、その人誰っていう。頭の中で、誰だっけーっていう。それで、歌手とかも、名前もそこ行って初めて知った人も多かったですよ。逆に韓国の人の名まえを聞いて誰だっけっていう。それからずれているというかそれがあったんで。日本のことは知りたいんですけど、コリアサークルにいる人とちょっとずれがあるから、行っても面白くないというか、自分なりに面白くないと思って行かなくなったって感じです。

日本人学生の多くは、近年の韓国のポップカルチャーに関心をもってサークルに所属しているのだが、韓国出身の留学生全てが必ずしもそうした分野に詳しいとは限らない。韓国出身の交換留学生は、男性の場合、兵役を終えて留学する場合も多い。また女性の中には、いったん社会人を経験してから大学の夜間部に入学し、懸命に日本語を勉強した結果、交換留学生に選ばれ留学を果たす学生もいる。コリアサークルに所属する秋田大学の日本人学生とは年齢が一回り近く離れている場合もあり、日本人学生の興味と自らのそれとが合致しないことも往々にして起こりうる。Dさんもそうした理由でコリアサークルには行

かなくなり、Bさんの里親やその友人との関わりが強くなっていった。

調査者（里親や里親の友だちと）何話すんですか。

Bさん 特別のことでもなかったんですけど、ただ、声かけたら、それが、ひゃーという。

Dさん 恥ずかしい（笑）。

調査者 でもその若い、 코리아サークルに来るような学生とはあんまり話題が違うから、あんまりなんですよ。おばさんたちとは？

Dさん そこでずれてる話題を、そこで聞いたものを、そこで知ったのをちょっとネットとかで調べたんですよ。ちょっとでもやってみようかなと思って。その知識を利用したっていうか（笑）。

調査者 あーおばさんに対しては（笑）？ でもそのほうが、なんていうか、まあ私はちょっとわかるっていうか。若い人、自分より年下の、ほんとに、 코리아サークルの人って若いでしょ。1年生とか2年生の若い女の子と話すよりは、おばさんたちと話す方が話しやすい部分があるかな。

（中略）

Dさん 自分を全部を知らさなくていいっていうか。そんな感じで。

Dさんは、 코리아サークルに行っている時に調べた、韓国のポップカルチャーについての「知識を利用」して、年長の女性たちとの会話を進めていったようだ。また、Dさんによれば、日本の「おばさん」たちには、自分を全部知らさなくてもいいからつきあいやかったという。つまりDさんは、韓国人男性の一人として「おばさん」たちに扱われ、またDさん自身も自らをそのように位置づけていた。韓国人男性というカテゴリーに自らを託すことが、一種の半透明の防御膜をまとったような状態で他者とかかわり合うことを可能にしたようだ。

以上のように、留学生の生活に寄与する面があったのだが、里親と留学生とが一对一でマッチングされるため、ペアのあいだで交流の内容に大きな差がでることなどから、ハンゲっこの会は2011年に解散している。

3-5 韓国語を教えるアルバイト

Dさんの経験と同様のことは、カルチャーセンターで韓国語を教えるアルバイトをしたBさんからも聞かれた。

Bさん（今、韓国の）文化センターでギターならっているんですけど。その文化センターというところがおばさんたちが一番行くところで、私を除いておばさんです。でも日本のおばさんとは少し違うんです。（中略）私が出会った日本のおばさんは、みんな韓国に興味をもっているんですよ。それで親切で韓国のことを知りたくて、私韓国人ですからそれを興味をもって接するんですけど、韓国のおばさんたちは普通のおばさんですから、個人的な、個人情報を……。 （中略）韓国のほうが（プライベートな話を）するんです。（中略）韓国のおばさんたちは他人ですけど、家族みたいに接して、本当の家族のように関係がなりたつんですけど、日本のおばさんたちは他人の感じがするんですね。

調査者 それはあまりよくない意味？

Bさん いいえ。私はどっちもいいですけど、でもやっぱり私にとっては、日本の関係が楽です。

Bさんは、現在、本属の韓国での大学に戻り、卒業後の大学院進学をめざして勉強している。その合間にカルチャーセンターでギターを習っているが、そこで話しかけてくる韓国の「おばさん」は、結婚はいつするのかなど個人的な話を直接聞いてくるという意味で、家族のようであると同時にプライベートにずかずかと入り込んでくる鬱陶しい存在でもある。それに対し、秋田に留学していた時の「おばさん」たちは、Bさんを韓国人の一人として扱った。多数の中の一人として、個としての自分を前面に出さずに済むことが、Bさんにとっては気軽に感じられたという。

同じようにAさんも、「おばさん」との関わりを、もっとも印象深かったネットワークとして挙げた。Aさんの場合も、「おばさん」との出会いは、韓国語を教えるアルバイトがきっかけだった。最終的には一人の教え子が別の教え子や知人・友人を紹介したこともあって10人以上の「おばさん」と親しくなり、「そのおばさんたちといろいろなところで遊びに行ったり食べに行ったりした」という。それほど親密になり、また現在までもその関係が印象に残っている理由を、Aさんは次のように話した。

Aさん (韓国語を教えていたアルバイト先で) おばさんたちにもすごく仲良くなって、たまには旅行したりしてたじゃないですか。そこらへんもすごく、記憶に残って。私としては、もちろん授業も大事なんですけれども、日本人たちとのその関係がですね。なんていうか、私のために誰かが涙を流したっていう姿を見ると、それがすごく記憶に残りますね。その、韓国語を学んだそのおばさんたちとか。一対一でそこで会ったおばさんたちとかは、すごく私のことを心配してくれましたし、すごく一緒に何かを楽しみながら、そうしましたからそれがすごく気に入りました。日本に行く前に、日本人は建前がすごいっていうことをたくさん聞きましたから、何かちょっと違うんじゃないかなと。私がどこまで心を開ければいいのかわからなかったんですけど、2学期目のときは、すごくそれが。それは国の問題じゃなくて文化の問題じゃなくて、人との気持ちがあげれば、それを感じました。

具体的にいつどこでかは尋ねなかったので不明だが、日本人の「おばさん」たちが、Aさんのために涙を流したことがあり、そのことがAさんにとって帰国後も残る記憶となった。また、社会人経験を経て大学に入りなおしたAさんにとって、授業やコリアサークルで知り合う若い世代の日本人の心は非常にわかりにくいものと捉えられていた。

調査者 コリアサークルに出入りするような、若い子らとおばちゃんたちは感覚がずれたりもするから、ちょっとわかるような人が来ると、落ち着いて勉強できると違うかな。

Aさん なんか日本の若者たちはですね。わかりずらいですよほんとに。

調査者 日本の若者たちは？

Aさん 何が本気なのか。その心が、わかりずらい。

調査者 おばちゃんたちは、こうもっと理解しやすかった？

Aさん はい。もっと正直っていうか、考え方もちょっと違いますし。私がかこう言えば、

相手がすぐそれをわかってくれますから。私もおばさんみたいです（笑）。

若者に比べ、「おばさん」は「建前」で接してこず、自分が言いたいことを理解してくれたという。さらにまた、それぞれの「おばさん」が自分の人生について話してくれたことも、Aさんにとっては学びとなり面白かったようだ。

Aさん 秋田出身もいましたし、ほかの出身もいました。ような気がしますけど。いろんな人生を生きてきて、自分の人生を私に話してくれますから、その中で私もいろんなことが学べるし、あーいいなあって（笑）。すごくいろんな話を私にしてくれますね、授業より（笑）。いろんな話。面白いですね。

調査者 若々しくはないでしょ。大変だったわーとか、そういうやつでしょ。それ聞いてて楽しいですか。

Aさん でも面白いです。昔、自分がどんな仕事をしていて、どんな状況にあって、この人と結婚してこんな生活して。まあこんな話とか、それを聞いていると、人生って、大変なことだなあと（笑）。

DさんやBさんが、韓国に関わることについて尋ねられ、韓国人の一人として扱われることを気楽に感じ「おばさん」たちと親しくなったのに対し、Aさんの場合は、お互いに正直に、個人的な話題にまで踏み込み語り合える関係となったがために、その関係に愛着をもっていったと言える。

3-6 飲食店でのアルバイト

秋田大学に2年近く留学したCさんにとっては、学外での生活が4割の重みを占めていた。学外での活動の中でも、特に一番強いつながりとなったのは「バイト先の仲間たちとの交流」だった。Cさんによれば、たとえ留学生と交流するための授業を受講している日本人学生であっても、本当に留学生と友だちになろうという気持ちがあるとは感じられなかったという。

Cさん その「日本事情」⁽⁴⁾を一緒に取ってる子の中で、本気で、友だちになりたいって、そういう思いをしたこともあまりありませんでしたし、その子たちはただ授業が単位がとりやすいから受けてるんじゃないかな、そういう印象もけっこう。

それに比べ、アルバイト先の飲食店には同じ年ぐらいの、しかし境遇の異なるさまざまな人々が働いており、その人たちが韓国人ということで自分に興味をもって話しかけてくれたことが、Cさんにとってうれしかった。

Cさん （アルバイトの同僚の）一人、秋田大学でした。

調査者1 あとはいろんな大学の人？

調査者2 学生じゃなかった？

Cさん 高校生とか、学校通っていない子とかも。

調査者2 アルバイトだけで生活して。

調査者1 そういうのも関係あるのかな。つまりその、学校の人じゃないから。さっきのBさんの、ちょっと距離があるほうが楽っていう。そういうのあんのかな。学校の人と違う人だから、また違う面が。（中略：主に調査者の、大学関係だとまた大学で会うから面倒だというようなことがあるかもしれないという内容の

話)

Cさん ただ、日本人の友だちができたってことだけがうれしくて。(中略：調査者の、大学の中では友だちができにくかったのか、そうであってもそれはいろんな学生がいるので問題ないという内容の話) 自分の性格が、自分からは、人に声掛けたりそういうのが苦手なので、学校ではあんまり先に声掛けてくれる人があんまりいなくて、自分の問題なんですけど、バイト先では、けっこういろんな人が。韓国の人が私しかいなかったから。やっぱり。

こうしてアルバイト仲間とは友人関係になり、うち3名は帰国後の現在でも連絡を取り合っているだけでなく、Cさんを訪ねて韓国にも遊びに来たとのことである。このCさんは、里親とは最初の1年間は頻繁に会っていたものの、2年目には他の里子が来たこともありあまり会わなくなっていった。また 코리아サークルにもなじめなかった。日本人と語り合う活動の多い授業でも、日本人学生から友人になろうというアプローチがなかったため、親しい友人はできなかった。自ら積極的に友人関係を開拓する性格ではないCさんにとっては、里親やサークル、授業はいずれも、他者との関わりを作っていく場としてはうまく機能しなかったと言える。そのCさんにとっては、お互いに協力して物事を進めざるを得ず、また韓国人留学生という珍しい存在として語りかけてくれる人のいるアルバイト先が、帰国後にまで続く関係作りを可能にした場所となった。

また、里親との関わりが大きかったとしていたBさんだが、アルバイト先の飲食店での経験も非常に印象的だったという。このアルバイト先では日本のサービスの方法を学んだほか、敬語を実際に使う機会も得られた。しかし一番記憶に残っているのは、次のような常連客の存在だった。

Bさん 障害なんですけど頭の障害？ 常連さんの中で、そのお客さんがありましたけど、歳は私と同じぐらいだったんですが、3人のおばさんと一緒に来たんですよ。その障害をもっているお客さんが私を、私が好きで、

調査者 気にいったの？

Bさん いつも話しかけたんですが、「どもり」ながらいつも話しかけたんですけど、いつもわたしを惚れてくれたんですが、おばさんたちは私に迷惑かけてしまうと思って。でも私はそれが一番、

調査者 記憶に残ってる？ 印象的。

Bさん はい。

調査者 よく来たんですかじゃあ。

Bさん はい。

Bさんにとって、自分のことを気にいり通いつめてくれる客がいたことが、何よりも深く印象に残ったできごとだった。

3-7 日本事情・多文化間交流論

Cさんのように、大学の授業で出会った日本人学生とは友人になれなかったという留学生もいれば、授業をきっかけに現在も続く友人関係を作った者もいる。

Eさんは1学期だけの交換留学生だったが、「日本事情」という授業で友人を得て、最近

もその友人とソウルで会って遊んだという。「日本事情」は、毎学期開講されている教養基礎教育科目であり、留学生と日本人学生とがグループで調査・発表を行うというものである。この「日本事情」は、Cさんが日本人学生から友だちになりたいという気持ちを感じられなかったとした授業であるが、同じ授業であってもそれを契機に継続的な関係を築いた者もいた。

そのほかに複数の留学生が、「多文化間交流論」を、その後の継続的な人間関係のきっかけになった授業として挙げていた。「多文化間交流論」とは、教養基礎教育科目として毎年2学期に開講されている授業で、北東北国立三大学の合同合宿への参加を中心的活動としている。北東北国立三大学合同合宿は、秋田大学・岩手大学・弘前大学が順に当番校となり実施するもので、毎年計80名程度の留学生と日本人学生とが、一泊二日または二泊三日でプロジェクトワークに取り組むことになっている。またこの「多文化間交流論」は、日本語がほとんど話せない留学生も受講が可能で、受講生が使用可能な言語を媒介に意図疎通を図りながら進めていくという特徴をもつ。

Gさんは、自分は「英語できなかったけど、周りの人もだんだん（日本語が）できるようになってくるし、友だちができた」とのことで、この授業を通し日本語があまり使えない留学生と次第に親しくなっていたと話した。またFさんとHさんは、合宿を通じて他大学の留学生や日本人学生とも継続的な関係を築くことができたとしている。たとえば、Fさんは、合宿で泊まった場所もよかったし、「自分が誘って夜遅くまで話し合えた。岩手県の学生みんな優しかった。また弘前大学の学生も一緒に旅行に行くぐらい縁がながった」という。またHさんは、週1回の授業で1学期間会い続ける人とよりも、二泊三日の合宿で出会った人とのほうが親しくなりやすかった、岩手大学の学生と今も連絡をとりあっていると話し、こういう授業を受講できたのはとても「運がよかった。ほかの大学に行った学生も、そんなクラスはなかったと言っている」と高く評価している。

3-8 教会・部活・旅

以上は複数の交換留学生が、印象に残るまたはその後にも続く人との出会いがあったとして挙げた場所である。最後に、一人だけが言及したそのような場所について紹介しておきたい。

コリアサークルや「日本事情」、友だちの里親など、さまざまな場所で印象的または継続的な出会いがあったとしたEさんは、教会についても言及した。大学外での出会いはほかにあったかという質問に対し、Eさんは、自分はキリスト教信者であり、秋田でも「近所の教会に通ってたんです。ここで知り合った人と。ここで日本の人と結婚した韓国の女性の方がいて、そのおばさんにいろんなものをもらったんですよ。キムチとか。それでほかもつながりがあったんですよ」と答えた。毎週通う教会で、同じく韓国出身の秋田在住者と会い、その人からさまざまな物をもらうという形で援助を得ていたという。

また、体育教師をめざしているHさんは、秋田大学に来る前から体育系のサークルや部活に入りたいと考えていた。

Hさん 日本ならではのものがあって、塾（日本語学校）とかにはない、会、あつまりがあるじゃないですか、大学は。私の場合、サークルとか部活とか。本当にや

りたかったので、日本に行く前から計画して、行ってすぐ入ったんですけど。やっぱり大学じゃないとそれはできないんじゃないですか。

Hさんの友だちの中には、日本語を学ぶために日本に行くのだからと、日本語学校を選ぶ人も少なくなかった。しかし大学を選ぶことで、サークルや部活という特別な団体に入ることが可能になったと、Hさんは話した。Hさんは留学期間中を通して部活動に参加しており、授業外の活動場所として重視していたことがうかがえる。

最後に、友人の里親ら「おばさん」たちに人気があったDさんは、授業外でもっとも記憶に残った活動として、長期の休みに一人で全国を旅したことを次のように話した。Dさんにとっていかに重要な活動であったかが、その詳しく熱のこもった語り方からうかがわれるので、できる限り省略せず掲載したい。

Dさん 休んでるときには、できるだけ外に行こうという感じで。秋田だけじゃなくても、東北も。東北も回って、祭り全部見て。北海道も行ってきて。冬休みのときには、四国も行ってきて。

(中略)

調査者1 面白かったことありますか。四国とか行って。

Dさん 四国、そこ香川大学の、今ハンバット大学と協定結んでいる香川大学の一人の友だちがそこ行ったんで、そこ遊びに行こうと思って行ったんですけど。やっぱりなんか秋田とちょっと違う雰囲気とか、人々の行動っていうかそれも違うなって思うところが。実際秋田に住んでた時とそこ行って、約1週間あったんですけど。そこで見たものも、「あ違うな」って思うところが結構あったんで。

調査者1 へー。興味があるけど、何が違うんですか。覚えていることは。

Dさん 覚えてるのは、やっぱり、秋田駅の前の「ゆきうどん」ってあるじゃないですか。

調査者1 さぬきうどんの。

Dさん はい。そこでうどんを食べるとき、その香川大学に行った友だちが、香川県のものだと言われたんで、こんなふう食べるのかなと思ってそこ行ったら、全然雰囲気も違うし、食べ方とかも全然違うし。それに、歩いている人の、雰囲気っていうんですかね。秋田の人はちょっとゆっくりって感じが、僕的には私的にはそう感じたんですけど。

調査者1 いいふうに言うとのんびり。

Dさん のんびりって言う雰囲気があったんですけど、そこ行ったら、周りの人が、やっぱりちょっと早いっていうか。それに声をかけると、反応が違うんですよ。秋田の人は、親切に教えてくれるって感じがあったんですけど、その人は今、忙しいからって感じがあったんですよ。

調査者2 忙しそうにしていた？ 道聞いたりしても？

Dさん はい。多かったですよ。割合っていうか。ちょっと微妙な違いなんですけど、私的にはそれを感じたんで。

調査者2 僕は近い、そっちの大阪は近くの方だから、東北に行くといろいろ遅いなとよく思いますから。ご飯が出てくるの遅いなとか。いろいろ思いますから。それは、なるほど。

調査者1 東北の中でも違いますか。東北回ってみて。

調査者2 弘前とか行ったんですよね。

Dさん はい、ちょっと違いますね。方言もちょっとずつ違ってくるし、仙台とそこらへんをまわるときには、ここ東北じゃないような気がするっていう。

調査者2 仙台あたりまで行くと？

Dさん 仙台あたりは。

調査者1 都会だってこと？

Dさん はい。都会も都会なんですけど、東北らしい雰囲気がないって思ったんですよ、最初に着いたとき。田舎の雰囲気っていうか。ちょっとこういう言い方あれなんですけど。田舎の雰囲気がなくなっているっていうか。のんびりしている人がいないっていうか。そこらへんだけ。良く言えば活気があるっていうそんな感じなんですけど。

この一人旅は、 코리아サークルや里親と異なり、継続的または印象的な出会いがあったと言える場所ではない。また、何度も訪れるというような、特定の居場所と位置づけられる場を得た活動でもない。しかしDさんにとっては、一人で各地を旅し、自身の目で日本各地あるいは東北各地の異なりを確認したことが、留学生活の核として認識されている。Dさんは、秋田大学での授業に対する感想を聞いた際、日本語の勉強は韓国にいたときに十分やりつくしたという思いがあったので、秋田大学に来て1学期目に日本語の授業のみを受講した際には特に印象に残った授業はなかった、しかし2学期目は日本人と一緒に授業を自分で選んで取ることができたので、満足感が得られたと話していた。自分自身で選びとるということが、Dさんの満足感を支えていたことがわかる。長期休暇中の一人旅は、全てを自分が選択決定できることであり、またそうしなければ旅は成功しないという意味で、全てが自分の責任に返ってくる活動である。自分自身が生み出し結果が自分に返ってくる旅は、場所・人ともに短期間で移動するものでありながらも、Dさんにとって自分の「居場所」と感じられる活動だった。

4. 結論：多様な「居場所」

以上のインタビュー結果からみえてくるのは、帰国後も維持しているネットワーク、記憶に残る人々やあつまり、行為などがおどろくほど多様であり、ある留学生にとっては貴重な場であったとしても、ほかの留学生にとってはあまり意味をもたない場合もあるということである。たとえば 코리아サークルは、Gさん、Fさん、Hさん、Eさんにとっては重要な場として感じられていたが、Iさん、Dさん、Aさん、Bさんにとってはそうではなかった。また 코리아サークルを重要だとした3人の内でも、Fさんは自分から働きかけて活動できる場として意義を見出していたように、その力点は異なっている。

코리아サークルにそれほどなじまなかったIさん、Dさん、Aさん、Bさんらは、いずれも「あきたのファミリー」や「ハングっこの会」の里親などの、年長の人々とのつきあいを重要なものとして記憶しており、現在もその交流を続けている者もいる。AさんやBさんは、ハンバット大学の夜間部に所属する、社会人経験をもつ学生である。つまり 코리아サークルにあつまる大学生よりはやや年長であり、そのために 코리아サークルの学生とは

話題を合わせるのが難しかったと当人たちは回想している。しかしIさんやDさんはそうではなく高校からストレートに大学に入学しているので、必ずしも年齢の違いが決定的な要因だとは言えない。また、同じように「おばさん」との関係を重要なものとしてすごしていた留学生のあいだでも、「涙を流してくれ」たり人生の話をしてくれたりと、対話を通じて深いつきあいができたことを記憶するAさんに対して、BさんやDさんにとっては、「韓国のおばさん」に比べて自分の全てをさらさなくてもよい、「楽」な相手としての「日本のおばさん」がありがたい存在だったという違いもある。

同年代の友達にせよ、年長の知り合いにせよ、そのような人々との出会いの契機は、サークルや里親だけではなく、Eさんのように授業で知り合った友人、CさんやGさんのようにアルバイト先の友人や店長、Aさんのように韓国語を教えるあつまりなど、やはりこれも多様である。人それぞれ、帰国後も印象に残っている活動、継続して連絡を取り合っている人たちと出会った場所は異なる。そしてそれらはいずれも、韓国での所属大学や性別あるいは年齢層によって傾向があるようには考えられず、あくまで一人ひとりの多様性があるようにしかみえない。

ここで気になるのは、公式の留学生への支援制度として準備されている、チューターについて言及する者がほとんどいなかったことである。既存の研究においても、チューターはそれほど重要な相手として認識されていないと指摘するものがあり（田中ほか 1991: 93）、さして珍しい現象ではないのかもしれない。ただ今回の調査対象は、もともと日本語を専攻する韓国の学生であり、チューターはほぼ 코리아サークルのメンバーと重なっていた。そのため、 코리아サークルでのつきあいとチューターとの関係を区別していなかった可能性がある。また今回の調査対象者には含まれていなかったが、韓国からの留学生のチューターとして、学習の面でも生活の面でも留学生の支援を十分に果たした例を調査者は確認しており、チューター制度の意義が薄いと主張するつもりはない。

ただ、里親やアルバイト先の店長など、学外で生じた年長者との関係を重要なものと記憶している留学生がこれほど多いことは一考に値する。授業はある種人工的な場所であり、かつ他者と友人関係を作ることを教育目標としているわけでもないのに、友人ができないことも不思議ではない。しかし 코리아サークルといった、韓国に興味をもつ若い学部学生が集まる場に価値を見いだす交換留学生が必ずしも多くないのはなぜなのか。

逆に言えば、交換留学生にとって、自分よりはるかに年長の人々との交流がなぜそれほど魅力をもつのだろうか。韓国語を学びに来たり、里親の会に所属する人々は、何らかの形で韓国に興味をもっている。この点では、 코리아サークルに集う学部学生と変わらない。にもかかわらず、今回の調査では、比較的、年長者との交流のほうが重要だったと認識されていた。この理由を探ることで、留学生の「居場所」を考える際、何を注意すべきかがわかるだろう。

いずれにせよ、留学生にとって重要な場所や出会いは、誰にもコントロールできない偶然性の産物であることだけは確かだ。当事者にとっても周囲にとっても、こうした他者がどこにいるかは事前にはわからない。重要なことは、そうした出会いが可能な場が複数あり、学生が取捨選択できるような環境である。「ひとそれぞれ」と言ってしまうえば簡単に聞こえ、大学としての努力を怠ることを容認するように見えるかもしれないが、大学に要

請されているのは、制御できない出会いの機会をどのように整えるか、という、実はより困難な課題である。

*本研究の実施にあたっては、平成23年度秋田大学年度計画推進経費（教育研究プロジェクト・連携融合研究）「留学生教育プログラムに関する理論的・実践的研究と独自プログラムの構築」（実施代表者：牲川波都季）の助成を得た。

注

- (1) 「大学校」は日本の4年制大学にあたり、「〇〇大学」は日本での学部にあたる。
- (2) 「特別市」は首都ソウル以外の主要な都市がもつ行政単位で、日本の「県」にあたる韓国の「道」と同レベルである。
- (3) いずれも 코리아サークルの中心メンバーである。また以下、個人の特定につながる固有名詞は全て仮名とした。
- (4) 「日本事情」クラスの詳細については、3-7を参照のこと。

参考文献

- 秋田県国際交流協会（2011）『あきたのファミリー報告書』秋田県国際交流協会。
- 菊岡由夏, 難波康治（2005）「短期留学生の学習環境に関する調査報告－2名の短期留学生に対するインタビューから－」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』（9）, 85-96.
- 田中共子, 高井次郎, 南博文, 藤原武弘（1991）「在日外国人留学生の適応に関する研究（3）：新渡日留学生の半年間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応」『広島大学留学生センター紀要』（1）, 77-95.
- 中山亜紀子（2001）「短期留学生の対人関係に関する一試論」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』（5）, 59-72.
- 松本久美子（2009）「帰国留学生に対するフォローアップ：カンボジアにおける訪問調査」『長崎大学留学生センター紀要』（17）, 17-32.